

# 弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

文学部・英語・英米文学科  
マックウィニー・スティーブソン

作成日 2024年1月4日

## 1. 教育の責務

2018年度から弘前学院大学文学部・英語・英米文学科に採用され、本年（2024年）で7年となる。

英語・英語言語学関係科目を担当し、主として英語、英語学、言語と文化を中心として、講義、演習科目を担当。

### 2023年度担当授業

科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
Oral Communication IA	1年	講義	前期	会話、聞くこと、話すこと
Oral Communication IB	1年	講義	後期	会話、聞くこと、話すこと
Composition IA	1年	講義	前期	作文の作り、文法、引用仕方
Composition IB	1年	講義	後期	作文の作り、文法、引用仕方
Composition IIA	2年	講義	前期	作文の作り、文法、引用仕方
Composition IIB	2年	講義	後期	作文の作り、文法、引用仕方
英語学原文購読	2年	講義	後期	英語の歴史、由来
Academic Writing A	3年	講義	前期	作文の作り、文法、引用仕方
Academic Writing B	3年	講義	後期	作文の作り、文法、引用仕方
英語学演習IA	3年	演習	前期	言語と文化の関わり
英語学演習IB	3年	演習	後期	言語と文化の関わり
英語学演習IIA	4年	演習	前期	卒論の作成、言語と文化について
英語学演習IIB	4年	演習	後期	卒論の作成、言語と文化について
卒論	4年	論文指導	通年	卒論指導、書き方、引用仕方、研究の仕方
キャリアデザインA	1年	講義	前期	ヒロガク教養講話の計画、運営、司会、集中講座の司会
キャリアデザインB	1年	講義	後期	計画、外部の講師と相談、司会。
キャリアデザインD	2年	講義	後期	計画、外部の講師と相談、司会。
言語・文学・文化の基礎	1年	講義	前期	Cultural Studiesの講義
キリスト教文化	1年	講義	後期	クリスマスの由来の講義

## 2. 教育の理念

学習者には無限の可能性があり、それを引き出すのは教師の仕事だと考えています。教師は、学生が成功するための方向性を提供しつつ、学生に対して高い期待を維持しなければなりません。悪い学習者というものはほとんどおらず、悪い教師だけが存在すると思います。学生は、成功のための適切なツールを与えられれば、教師の期待をはるかに超えて成長するものです。

教室を安全な環境とし、一人一人の学生にとって価値ある経験を提供することで、学生は各自固有の視点を共有し、より良い学習環境が育まれるものと信じています。快適な教室環境を構築することにより、学生が成長し続けることを期待しています。

私の教育理念は常に変化しています。自らの授業において、何が効果的で何が効果的でないかを見ながら、学生にとって最高の教育環境を作り出すために、終わりのない努力を続けています。

## 3. 教育の方法

アクティブラーニング：積極的な学生参加を促進し、単なる講義に頼らず、学習プロセスに能動的に貢献することを奨励しています。

学生の積極的な参加：学生は積極的に参加し、聞くだけでなくクラスメートとのコミュニケーションに主導的に取り組み、教材を包括的に理解します。

スキル構築とコミュニティ構築のためのグループワーク：グループワークは言語学習とコミュニティ意識の構築に活用されます。正しい答えを得るために協力が必要であり、さまざまな生活状況で応用可能なスキルを育成します。

学生のニーズに応える：教室の状況を継続的に監視し、学習の課題に直面する学生のニーズに対処します。すべての学生を支援することは難しいかもしれませんが、取り残される学生がでないよう最善を尽くします。

講義の実行方法：専攻講義では、学生の理解を確認するためにポイントを明確にし、学習を促進するために快適な環境を維持します。

授業の構造：授業は出席と短いライティング演習から始まり、その後、コースの資料に関する講義が続きます。単なる講義だけでは理解を保証できないと認識し、学生が課題に取り組む時間を確保します。

E-Learning の要素：文法講義、語彙クイズ、教育ビデオなど、さまざまなeラーニングツールがオーラルコミュニケーションと英作文の学習をサポートします。

評価：幅広い評価ツールを使用し、学生が執筆、スピーキング、プレゼンテーション、詳細なレポートで効果的に自分を表現できるようにします。ルーブリックは正確な評価を確保するために年間で一貫して使用されます。

#### 4. 教育の成果

評価について、「授業評価アンケート」の結果を踏まえて述べます。

##### 1. 「学生自身の自己評価」に関して

ほぼ全ての授業が、全学平均を上回るスコアを獲得しました。唯一の例外は、「Oral Communication I」と「Composition I」で、学生の準備不足が指摘されました。両者において、学生が明確な予習が必要であることが示唆されています。英語学原文購読が難しいとの指摘もありますが、これはおそらく授業が英語で行われていることに起因すると考えられます。

##### 2. 「授業担当者に対する評価」に関して

ほぼ全ての授業が、全学平均を上回るスコアを獲得しました。ただし、平均を下回ったのは主に英語で教えられた授業、または多くの英語を使用した授業だけでした。英語で行われる授業において学生が理解するのが難しい場合があるため、これは予測される結果です。学生が授業内容を理解し、別の方法で授業に追従できることが重要です。

##### 3. 「授業内容に対する評価」に関して

ほぼ全ての授業が、全学平均を上回るスコアを獲得しました。例外は「Oral Communication I」「Composition I」「Composition II」で、これらの授業は前期の教科書が英語の基礎から始まるため、新生には簡単すぎると感じるものが理解されました。同様に、「Composition II」は1年生の内容を復習することから始まります。したがって、これらの教材を使用する学部の決定の背後にある論理と理由を学生が理解していることが重要です。

#### 5. 教育の改善

1. 授業前の学生対応に関して、各授業の前に、学生に対して適切な準備が何かを明確に説明することが肝要です。同時に、授業中に学生の進捗をフォローし、しっかりと授業の準備をしているかどうかを確認することも欠かせません。

2. 英語での指導を理解する学生の能力は、学科全体からの統合的なサポートが求められる教育の一環です。現在、英語での授業を担当する教員は限られています。学生が英語をより適切に理解できるようにするためには、大学が英語での授業を増やし、その実現に向けて教員を支援することが不可欠です。

3. 大学が採用した教材は時代遅れになりつつあります。この結果、これらの教材を授業でどのように実施するかについていくつかの問題が生じています。学部の改善、新しいカリキュラムに移行するにつれて、より最新の教材を選択することが不可欠です。その間、教師は既存の教材を現代に適応させるための努力を続ける必要があります。

## 6. 教育の目標

1. 学生向けのサポートシステムの向上: 学生は学問的な側面だけでなく、人生全体にわたって発達を促進するために強力なサポートシステムが必要とされます。現行のチューター制度は初期段階で影響を与えていますが、後期になるとチューターとの面談機会が減少します。私の3年生チューターとしての目標は、学生が成功するためのサポートを継続的に提供するシステムの開発に貢献することです。
2. eラーニング: eラーニング教材の開発は、当学科が設定した目標の一環です。この目標を達成するために、講義をデジタル化し、学生が授業前に内容をプレビューし、授業後に復習できるようにする計画があります。
3. 講義スタイルの改善に取り組む: 自分自身を有能な講師と考えていますが、英語と日本語の両方で非常に難しい言葉を使う傾向があります。学生の中には、私の言葉を理解するのが難しい場合があるかもしれません。また、話し方が速いこともあります。これに対処するため、私は講師としてのスキル向上に引き続き取り組み、英語と日本語の両方の学生がより効果的に理解し統合できるよう努めます。

### 【資料】

1. ループリック
2. 授業評価アンケート
3. シラバス
4. 授業改善書